『嵐が丘』試論

―古典にして最新作―

kazuma-takanashi

『嵐が丘』試論　ー古典にして最新作ー

　『嵐が丘』というタイトルの通り、まさに嵐のような激しい人間関係を描いたこの作品。この物語が今日まで読まれ続ける魅力は一体どこにあるのだろうか。
この『嵐が丘』という作品を語るうえで欠かせないキーワードはいくつもある。私はその中で「全知の語り手の不在」という言葉を挙げたい。この物語は嵐が丘と鶫の辻の両家を、突如舞い込んだ男ヒースクリフが絶望のどん底に叩き落とすというストーリーであるが、その渦中にいるヒースクリフ本人やキャサリンの視点で描かれてはいない。この一部始終を傍観していた使用人ネリーが、鶫の辻の間借り人であるロックウッドに思い出話として聞かせるという体裁を取っている点が、この作品をより個性的に引き立てている。
　通例として、小説には主人公がその独自の視線で物語を読者に聞かせる一人称視点と、作者のペルソナである「全知の語りの視点」と呼ばれる三人称視点がある。三人称視点で描く場合、その視点は「全知の語り手」になるのだから、登場人物の行動や感情に嘘偽りを付加してはいけない。しかしこの『嵐が丘』は、ネリーという一種の「神の視点」を持っていながら、その語り手は決して「全知」ではない。この使用人は登場人物の行動を事細かに記憶し描写しているが、あらゆる箇所に彼女の私情が入り込んでいる。読者はその見解にいちいち不信感を抱きながら、より物語の中に引き込まれていくのである。ネリーという語り手が物語の雰囲気を全て掌握していると言えば、ネリーは間違いなく「神の視点」を持っている。しかし、登場人物がどんなに怒り、悲しみ、その個性的な感情を爆発させようと、それを傍から見ているネリーの語りがその感情の原型を歪曲させているために、読者はそのそれぞれを性格抜受け取ることが出来ず、想像力を働かせて物語に集中することになる。この「全知」ではない語り手が読者を物語に入り込ませる引導を渡してくれているということだ。そのため、この物語の雰囲気が悲劇にも喜劇にも似つかない絶妙なバランスを保っていると言えよう。
　また、「構造の複雑性」もこの作品のキーワードであろう。この作品の主な語り手ネリーをはじめ、聞き手であるロックウッドの感想、感情をむき出しにした登場人物の会話、日記や手紙のやり取り、ヒースクリフの死を描写した後日談など、それぞれの「語り」が様々に入り乱れている。あまりにもややこしいので、何度も文面を往復して流れを掴むのに苦労したという読者も多いことだろう。逆に言えば、この何層にも重ねられた複雑な構造が、この小説に更なる面白みを与えていると言えるのではないだろうか。
ヒースクリフの死によって物語は幕を下ろすものの、何かしら不穏な空気を残している。嵐が過ぎ去り静かな時間が返ってきた嵐が丘と鶫の辻には、今でもヒースクリフの魂が外来者を拒むように存在し続けている――そんな考えを読者に抱かせるような、良く言えば余韻を持たせる、悪く言えば後味の悪いラストシーンは、登場人物たちの多くの魂が会話している場所のように感じられてならない。
「古典にして最新作」――私は『嵐が丘』をこう体現する。この作品は複雑かつ巧妙である以上、今後様々な見解が生み出されるであろう。その点でこの『嵐が丘』は、あらゆる小説の先駆けになるだろう一面をまだまだ多く孕んでいるに違いない。

テスト

http://p.booklog.jp/book/64713

著者 : kazuma-takanashi
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kazuma-takanashi/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/64713

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/64713

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ